

2025年3月30日 受難節第4主日礼拝メッセージ

「これに聞け」

水谷憲牧師

聖書 マタイによる福音書 17章 1-9節

山というのは、昔から神々の住む場・神々と出会う場・神秘的な場でありました。今でも「山の神がやきもちを焼く」といって女性が入山するのを禁じている山もありますし、天台宗や真言宗などはそれぞれ比叡山、高野山に総本山があります。聖書においても、神様は山においてしばしば姿を現しておられます。モーセが神様から召命を受けたのはホレブ山、十戒を授かったのはシナイ山でした。預言者エリヤもホレブ山で神に語りかけられました。今日お読みした箇所においてイエスさまが弟子たち、今回はペトロとヤコブ、ヨハネの3名の弟子たちだけだったのですが、彼らと共に高い山に上られたと書いてあります。この「高い山」がどこのことかはわからないのですが、ここで弟子たちは、イエスさまの姿が彼らの目の前で変わり、顔が太陽のように輝き、服は光のように白くなったという様子と、またそのようにまぶしく変化したイエスさまと共に、モーセとエリヤという伝説の預言者たちをも目撃するという、まさに神秘体験をするわけです。

私の昔の知人に、「かつて天使を目撃したことがある」と言う人がおりまして、私もそんなガブリエルみたいな天使に出会ってみたいものよと羨ましく思うわけですが、残念ながら私自身は凡人ですので、そんな神秘体験などにはほとんど縁がなく、眠っている時に金縛りにあって怖い思いをしたというくらいがせいぜいのところなので、自分が実際この聖書の現場にいたらどんな風に自分が反応するのか分からない、きっとめっちゃめっちゃびびって「見たら死ぬ!」と思って直視できないかもしれないのですが、弟子のペトロはこの伝説の預言者たちが話をしているところに口を挟んでいくわけです。勇気ありますよね。「主よ、わたしたちがここにいるのは、素晴らしいことです。お望みでしたら、ここに幕屋(仮小屋)を三つ建てましょう。一つはあなたのため、一つはモーセのため、もう一つはエリヤのために」。アంతαいったい誰やねん、って感じなんですけど、実はペトロ自身も、この出来事を目の当たりにして「どういえばよいか、分からなかった」とマルコ福音書などには伝えられているんですね。きっとこの思いがけない突然の体験を、幕屋(仮小屋)を建てることでぜひとも記念しておきたかったのかもしれない。あるいは、自分の尊敬する先生だけでなく、伝説の預言者たちともお近づきになりたかったのかもしれない。いずれにせよ、ペトロとしてはこの神秘的な素晴らしい体験に興奮し

ていた様子です。

しかし、ペトロがこう話していると、光り輝く雲が彼らを覆い、「これは私の愛する子、私の心に適う者。これに聞け」という声の中から聞こえてきたというのです。弟子たちはこの声を聞いてひれ伏し、非常に恐れたとありますが、これはどうしたことなのでしょう。これはもしかすると、「幕屋（仮小屋）」にヒントがあるのかも知れません。「幕屋（仮小屋）」とはつまり、人の手で造られた建物です。ご存知のように、神様は人の手によって造られた建物にはお住まいにならない。一般的にキリスト教会は、神様を礼拝するために造られた建物ですが、しかしそれでもそこに普段から神様が住んでおられるわけではない。例えばここに私たち神を礼拝する者たちが集い、祈りをあわせるからこそ、神様はこの場所にもおいでくださるわけで、2人または3人が集まることがないとそれは教会とはならないように、神を礼拝する者が誰も集うことがない建物に神様はお住まいになるはずがないのです。私がよく結婚式などでホテルのチャペルを訪れた時に感じる違和感というか、そこで行われている儀式の嘘っぽさも、偽物の牧師があまりに多いということも一つにはあるのですが、その一連の儀式がまことの礼拝となっていないから、すなわち、新郎新婦が神様の不思議な導きによって引き合わされたことを喜び、そのような不思議な御業を行われた神様に感謝するものとなっていないがゆえに、その結婚式がいかにも豪華な設備と多くの参列者によるものであっても、神様がそこに来て下さっていないように感じるからかもしれません。つまり、たとえ偉大なる預言者たちを記念するどんなに立派な建物であっても、たとえそれが純粹に神様のためだったとしても、神を求めて礼拝する者のめったに訪れることのない高い山奥にその幕屋（仮小屋）を造るということは、私たちの生活の中で常に生きて働かれる神様をそんなところに押し込めてしまうことになるのではないのでしょうか。それを神様は喜んでくださるのか。それは本当に神様の御心に適う働きなのか。雲の中から聞こえてきた声は、おそらく神様ご自身の声だったと思われませんが、神様はこの無邪気な弟子たちに「キリストが民衆の只中で行われた福音宣教の業をすぐそばで見たりしながら、わかっていないのか。自分は良かれと思ってやっているのかもしれないが、それが果たして適切なことかどうか、私の愛する子に聞くがよい」といわれたのかも知れません。

神様が私たちに求めておられるのはきっと、こちらの一方的な思いでどうこうしよう、こうすれば神様は喜んで下さるに違いない、こうすれば目を留めてもらえるだ

ろうか、とこちらの思い先行でいろいろと動き回るのではなく(もちろんそれも大事なことなのだけれど)、それよりもむしろ、ただ神様の言われること、キリストの言われることに私たちが聴き従うこと、聴従することなのではないでしょうか。それは、ただ神様に従うだけという主体性のない信仰ではなく、自分の今なしていること、あるいはなしていないことは果たして神様が求めておられることなのだろうかという自分に対する問いを常に抱えつつ、主の言われるままに従い、主の言われなことはなさないという、主体的な信仰のあり方なのです。ですから、そこにはいつも「神様が私たちに求めておられることは何なのか」「イエスさまはいつも私たちに何を語っておられたであろうか」という問いが、私たちの中になくはならないことを思います。その意味においては、今回ペトロが 3 つの幕屋(仮小屋)をつくろうとしましたが、それは神様が言われたことでもなく、イエスさまの教えの中にもないわけですから、ただペトロの肉の思い、自分の思い先行のものだったと言わざるを得ないでしょう。ですから神様は「これに聞け」と言われたのではないのでしょうか。そして弟子たちがその声にひれ伏し恐れたというのは、その声によって神の御心を離れた自分よがりの思いに改めて気付かされたからだったのかもしれませんが。

そのように、予想外の劇的な出来事、いわゆる神秘体験のために有頂天になり、神様の御心から離れてしまった弟子たちの姿を神様は問われ、弟子たちはそのことで恐れひれ伏すことになってしまったわけですが、しかしそんな彼らに対してもイエス・キリストは近づき、手をふれて優しく声をかけて下さいました。自分の気づかないうちに神様の御心から離れて自分中心の思いに陥ってしまう私たち、そのことに気付かされてしばしば落ち込んでしまう私たちですが、そんな弱い私たちであってもキリストは決して見捨てることなく、いつも寄り添ってくださり、手をふれて「起きなさい。立ちあがりなさい。恐れることはない」と優しく声をかけて下さるのです。「彼らが目を上げてみると、イエスの他には誰もいなかった」。たとえ私たちから多くの人々が離れ去って行こうとも、イエス・キリストだけは最後まで私たちと共にいて下さる、イエス・キリストだけは絶対に私たちを見捨てることはなさらない、ということ、私たちはいつもしっかりと憶えていたいと思います。

その後「一同が山を下っている時、イエスは『人の子が死者の中から復活するまで、今見たことを誰にも話してはならない』と弟子たちに命じられた」とあります。なぜイエスさまはこのようなことを言われたのか。「今見たこと」とは、弟子たちが体験したこと、イエスさまの変容と伝説の預言者たちを目の当たりにし、雲の中か

ら神の御声を聞いたこと、すなわち弟子たちの神秘体験そのもののことであったと思われます。イエスさまはそれを、誰にも話してはならないと命じられたのです。「天使を見た」という友人の話ですが、当時私はそれを聞いて「ふーん、すごいね」。もちろんその人の体験を否定するつもりはまったくないものの、今ひとつその劇的な体験を共有できない自分がいたことも確かでした。「神秘」とは、「人間の知恵や普通の常識でははかりしれないような不思議さ」とされていますが、そういう神秘体験の感動というものはなかなか共有しにくいんです。イエスさまは弟子たちと一緒に山を下りる時、この神秘体験、神との出会いの体験について、人々にただ口だけで触れ回ってもそれだけでは人々には伝わらない、神様と出会ったその体験を人々と共有してゆくためには、その体験によって変えられた私の姿を、これからの実際の生活の中で周りに証ししてゆくしかないのだ、ということを伝えたかったのかもしれない。

キリスト教会も、ある意味ではこの高い山と同じかもしれません。私たちは週に一度、教会という高い山に登って神との出会いを体験します。しかしその体験をただ口だけでよかったよと言ひ広めようとしても、人々と共有することは難しいでしょう。それよりも私たちが、山を下りた日常の生活の中で、神様との出会いによって変えられた私を証ししてゆくことの方が、生きて私たちの間で働かれる神様のことを広めてゆくためには大事なのです。口で言うのは簡単ですが、実際なかなか難しい。現在のこの世の中、宗教は敬遠され、金さえあれば何でもできる、貧乏人は自己責任、金がないからそれを得るために年寄りだろうと女性だろうと虫けらと同じように扱える。自分が発したひどい言葉のせいで誰かが死のうと、俺のせいじゃない、そいつにやましいことがあったのだろうと責任を決して引き受けない。聖書のこの時代の世の中から 2000 年たっても、全然変わっていない。だからこそイエスさまは、話してはならない、口だけではなく、身をもって福音を証しをせよ、とそう言われたのではなかったか。ですから、そのために私たちは「これに聞け」という言葉を受け止めて、いつもキリストの言葉、キリストの姿に自分の姿を照らし合わせつつ、倣いつつ、共に労り合い、支え合い、祈り合って、神様との出会いによって変えられた自分の姿を日常の中で証ししながら、歩んでいきたいと思っています。